

ペットを飼うことの意義とその効果による幸福度

1180405 岡川匠

高知工科大学マネジメント学部

1. 概要

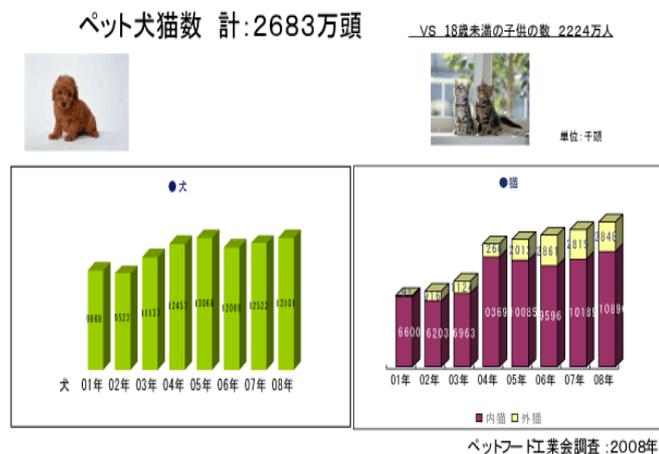
近年、ペット大国と言われて久しい日本だが欧米諸国に比べるとペットに対する意識や法、文化と意識の国民意識の大きな違いなどがある。その中でも日本は後退国でありペットや動物に対しての取り締まりが甘いと思われる。その結果ペットを捨てる人は後を絶たず殺処分のシステムも無くなっていない30年前に比べると大幅に減少したとはいえ、今でも年間10万頭近くの犬猫が殺処分されているのが現状である。そのような環境の日本でペットを飼っている人は本当に幸福を感じているのかどうかについて疑問を持った。インタビューによる聞き取り調査の書き起こしからペットを飼うことによる幸福度とその要因の相違点を比較・分析した。人がペットを飼うことで、様々なコストや経済的負担がある事、しかし、各個人間で要因や動機は異なる場合はありつつ、動物が好きと云う根本は共通し、相対的には幸福が増幅している事が分かった。

2. 序論

現在の日本はペット大国と言われており、ペットを飼う人は総人口の4割に達した。これは18歳以下の子供の数よりも多く、人の出生数は少子高齢化に伴って減少している。

社会的ニーズの確認

全国犬猫飼育頭数調査

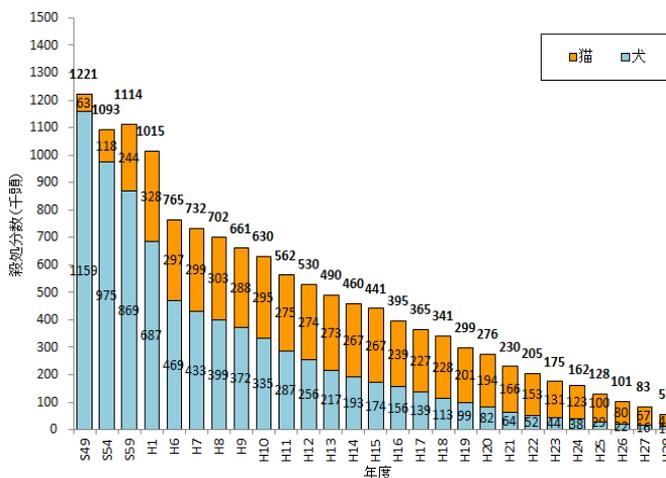


多くの人々がペットを「家族」として迎える中、その場限りの安易な考えでペットを購入し、世話が適当になる、思いやり

の心、飼い主としての責任を忘れてしまっている場合も見受けられる。最終的には、無責任にもその「ペットという家族」を捨てる人がいるのも事実である。日本は対策として動物愛護法などの動物に対する法律を厳しくし、ペットショップやブリーダーハウスからの安易なペットの販売を減少させた。欧米などのペット先進国では犬猫の明確な殺処分という機関、システム自体がまず存在していない。それはペットを飼うものではなく人と同じ痛みを感じる存在であると唱えられ、平等な立場であると認識されているからである。飼い主が守れないのであれば社会が動物たちの命を守るという使命のもとで過ごしているため殺処分は厳重な規則のもとでしか行われていない。一方、日本でも「殺処分0」を目指す機運が高まり今でこそ殺処分の数は年間10万頭を下回っているが、それでもなお毎年たくさんの犬猫が殺処分されていると言っている。今後法の見直しやペット関連の販売については世間的にも個人的にも考えていかなければならない問題である。そうした改善案や、ペットに対する考え方を知るには実際にペットを飼っている人に話を聞くことが一番であると思われ、この調査による結果をまとめ実行に移すことで殺処分0に近づく一歩になるのではないかと考えている。

全国の犬猫の殺処分の推移

(環境省 動物愛護管理行政事務 平成28年度版)



28.htmlhttp://www.env.go.jp/nature/dobutsu/aigo/2_data

3. 研究手法

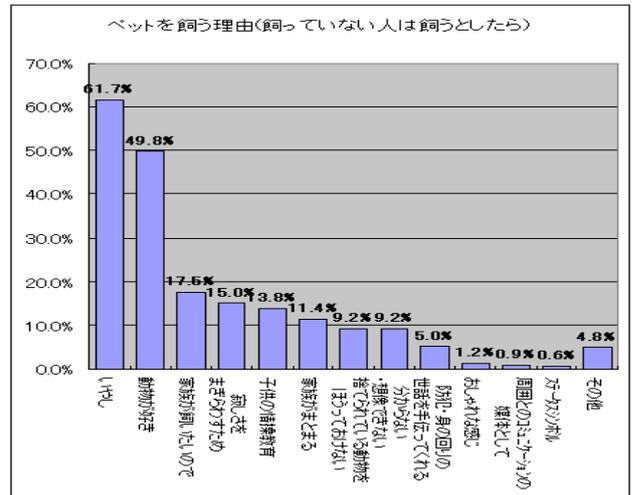
具体的な研究手法として、質的心理学(佐藤 2013)の観点からペットを飼っている人、及びペットショップの従業員に対してのインタビュー調査を用いた。その結果とそこから導き出される共通点と相違点を書き起こし、その内容を比較、検証していく。またそこから導き出される最善の対策がどのように機能していくかを検討する。ペットを飼うことによる幸福度の変化のため今回はペットを飼っていない人は対象外とする。インタビューの内容としては大きく分けて三つ。「ペットを飼うきっかけ (ペットショップに勤めるきっかけ)」「ペットを飼って良かったこと、悪かったこと」「ペットと人が住むより良い社会とは」この三つをメインにインタビュー調査をおこないボイスメモに録音したものを書き起こした。インタビューを録音することで話し口調や声のトーンなども読み取ることができ、幸福度のレベルを量りやすくなる。今回は録音データがすべてのデータとなるため書き起こしたインタビューの一部をそのまま書き表した。

4. 結果

今回はインタビュー調査に協力いただいた方の中から自分が深く印象を受けた三人を選抜し、書き起こしたものをまとめていった。

まず一人目にお話を伺った A さんはペットショップに勤める従業員の方で、家でも犬を飼っているとのこと。まず質問1をしたところ「小さいころから犬が好きでドックトレーナーを目指して専門学校に行きました。そこで就職先のコース選択の時にペットショップという選択肢を見て、インターンシップを体験した時にこういう形で犬や他の動物達と触れ合って仕事ができるのも楽しいかなと思って。あと、専門学校に進学する前からの条件で地元での就職という希望とも一致するのが今の職場でした。」と語った。ペット関連の職業に就く理由としてやはり動物が好きだという事が大きいようである。家でペットを飼っていることから二つ目の質問2について聞いたところ「犬を飼い始めてから家族の会話が増えた気がするかな。また散歩に行くようになって朝ちゃんと起きる習慣がついて運動不足もちょっとは解消されたかな (笑) あと、うちは認知症のおじいちゃんがおるけど自分も

家族のこともあんまり認識できとらんけど飼つとる犬だけは認識しとる。人には無い力を持つとるのもペットの良いところよね。」と少し苦笑いしながら語った。今回は結果的にだが、ペットを飼う理由として家族の時間の増加が入っていることから幸福度は上がっていると言える。「悪いというか大変なところ



ろはやっぱりお世話全般よね。ごはんもあげないかんしトイレも綺麗にしてあげないかん。喋れんから体調が悪くてもなかなか気づきにくいけん、普段からちゃんと見とかんとかあかんよな。寿命も人間より短いけん死ぬときは辛いけどその分いっぱい可愛がってあげないかなあって思う。」ペットを実際に飼っていること、ペットショップに勤めていることから、より深みのある心情がうかがえた。そして最後の質問3については「なんかいきなり質問難しくない? (笑) 何をしたら社会が良くなっていくかは一概には言えんけど、とりあえず私にできることはペットを飼いたって言って来てくれたお客さんに真摯に対応することかな。ペットの特徴とか飼うときに気を付けることとかをちゃんと説明する。この子にするって決めて家に連れて帰った後日、またお客さんが来てくれた時、調子はどうですかって気にかけてあげたりすることが大事なんじゃないかなと思います。」と難しい質問ながら職務に対する姿勢、動物に対する想いの強さが伺えた回答であった。ペットショップで働く A さんはお客さんがペットを自分の家族として一生共に暮らしてもらえるように精一杯のケアをすることでより良く共存できると考えられる。また、ペットを飼うことで家族の会話が増えたこと、おじいちゃんが自分の家を理解できるようになったこと、大変なこ

とを聞いた際に生涯可愛がってあげたいとの発言から、幸福度は上がっていると断言できる。

続く二人目は犬を二匹飼っている近所のBさん。よく散歩中にすれ会い、気さくに話しかけていただけるおばちゃんである。その人柄から今回のインタビューにも喜んで協力していただけた。まず質問1について聞いたところ「小さい頃にも一匹だけ犬を飼いよってねえ、やっぱり犬が好きってのが一番やけどうちは子供が家を出て一人になった時になんか物足りんって。そこで新しくワンチャンを一匹飼い始めたんやけど、ワンチャンも友達がおったほうがいいかなって思って二匹目を飼うことにしたんよ。お互いの性格は全然違うけどなんだかんだ仲良くしてよかったわ。うるさいぐらい賑やかになったけどねえ(笑)」と語った。下の図からも分かるように、寂しさからペットを飼う人は理由として少なくはない。特に一人暮らしの女性や今回のケースのように子供が家を出た後などに多くみられる。ペットを心の拠り所として共存しているようであった。

図4 ペットを飼った理由(1位から5位)

	飼育者全体 (回答309)		犬(回答135)		猫(回答180)		うさぎ(24)	
	順位	割合(%)	順位	割合(%)	順位	割合(%)	順位	割合(%)
ひとり暮らしは寂しい	1位	27.8	1位	27.4	2位	23.9	1位	41.7
話し相手欲しい		10.4		8.9		8.9	5位	12.5
自分を理解してくれる		7.8	5位	13.3		3.9		0.0
相手が欲しい		9.4		12.6		5.6	5位	12.5
子育て感覚を味わいたい	5位	14.2	4位	18.5	5位	9.4		8.3
ペットを飼うライフスタイルにあこがれて実家でも飼っていた	2位	24.3	2位	24.4	3位	21.7	3位	20.8
ペットショップで見て衝動的に		13.9	3位	20.7		5.6	2位	25.0
周囲の人が飼えなくなったのを引き取った	4位	15.5		7.4	4位	18.3	4位	16.7
拾った・捕獲した	3位	23.6		3.7	1位	38.9		0.0
その他		22.0		20.7		21.7		16.7

【出所】株式会社リプラン「ペット飼育の有無とライフスタイルに関する意識調査」

*上位5位以下の回答項目は順位を省略

*その他は順位に含んでいない

次に質問2について聞くと「まあ、とにかく可愛いわ。人間の可愛いとはまた違って何年見ても飽きん。あと、人間は自分でご飯食べたりトイレをしたりな、大人になったら働かないかんけど犬や猫は生きとるだけで偉いけんねえ。時間問わずキャンキャン鳴いて叱ったりもするし、散歩も毎日毎日大変やけど今になっては無くてはならん存在よね。」と満面の笑みで語った。この発言からも大変なことより飼って良かったという言葉聞くことができ、マイナスの感情は一切感じられなかった。最後に質問3について聞くと「そりゃあ自分の飼いよるペットを大事にするのが一番やけど、他の

人が触ったりしても大丈夫なようにちゃんと躾もせないかん。自分の犬が可愛がってもらえたら飼ってない人も何か飼ってみようかなって思うかもしれん。そしたら保健所とかの殺処分される犬や猫も少しは助かるでな。」と難しい質問だが真剣に答えていただいた。この会話からもペットを大事に想う気持ち、他の動物を救う解決案や打開策について真剣に考えていただいたことから幸福度は上がっていると断言できる。

三人目はインターン先でお世話になったブリーダーのCさん。今回のインタビューでは最長の二時間という長い時間にも関わらず終始笑顔でお話をいただいた。まず質問1について聞くと「もともと43歳まではサラリーマンをやっていて、なんかこのまま一生終わるのも面白くない、自分で何かやってみたいと思って、前から興味があったブリーダーを友達にちょくちょく教えてもらいながら仕事を始めてみたのがこの世界の入り口やったわ。この年になると退職してから再就職するのはなかなか狭き門だったし、人に使われるのも嫌だったからねえ。」と、なかなかシビアな回答だった。もともとペットにかかわる仕事に就きたかったわけでは無かったようだが、これまで続けてきた仕事をやめてブリーダーに転職するというのは人生の大きな転機だったようである。その流れで質問2について聞くと「生き物を扱うので休みがない。家庭も持ってるけど旅行とかの話が出てても簡単にどこかに行けないんですよ。ペットショップだとか雇われ側であれば休みがちゃんとあるけれど、ブリーダーの事業主となれば365日ほんとに休みはない。こういう面でも犠牲は多いと思う。」と今までの人たちと違ってデメリットの部分から多く語られた。その中でこの仕事について良かったことについて聞いてみると「良いところ…。まあ、簡単に言うと自分ですべてを決めるので失敗も成功も含めて達成感はサラリーマンの時には感じられることはなかった。サラリーマンっていうのはどんな役職、社長であっても雇われ社長であれば従業員と変わらない。でも僕みたいに完全に独立して経営してしまうとすべての責任が自分にあります。苦しさはサラリーマンの倍、でも楽しさも倍になりますね。あとはペットに関して言うと人間にはないものを動物は持ってるんですよ。人間には言葉があるからやっぱり傷つけたりすることがある。でも犬や猫には言葉がないので人間を傷つけたりはしない。

言葉での暴力がないよね。あと人間って人肌のぬくもりを求めただけで、哺乳類だから体温がちゃんとあるんですよ。それらを一言でまとめると“癒し”っていうことになるのかなあ、と思います。人間では癒しきれない部分をペットは癒してくれる、だから今でもペットブームってのが事業として成り立ってるんだと思います。」と語った。一年間休むことなく動物、ペットと触れ合っていることや経営者としてお客様と関わる時間や経験の多さから、発言の一つ一つに説得力を感じた。そして質問3について聞くと「まず、身近な良いところを言うと老人ホームなどに連れて行ったら普段笑わんおじいちゃんが笑顔になったり、言語障害のある人の状態が良くなったりしたからアニマルセラピーとしての効果はあるかなと。ペットと人がより良く生きていくには人間にない部分を持つ動物に癒しをもらってその分、しっかりお世話して可愛がってあげるのが大事なことではある。けど正直に言うと、個人の意識だけでは厳しいともう。だから行政が今動きをかけてる。例えば、マイクロチップの導入、これはもともと強制ではなかったけど水面下ではチップを入れないと販売してはいけないという法律に変わってくると思う。保健所も殺処分0を各都道府県で目指すように行政は動いてるけどいつまでたっても減らない。これが現状なんです。それを解決していくにはやっぱりペットを飼う際にどれだけの責任意識があるのかにかかっていると思う。だから、まずは行政がしっかりと法律の地盤を固めてそれを私たち人間がしっかりと守っていくしかないね。現在ペット先進国はアメリカで法律的にも厳しいけど、一番捨ててるのが多いのもアメリカなんです。日本はその真似をしてるだけだから、なかなか難しい、というか僕自身は無理だと思う。知識のないブリーダーが状態の悪いものや病気持ち、性別や色が違うものを売ったりしてたから厳しくなっていったけどそれでもその隙間をぬって新しいやり方で商売に繋げていく。だから一言でいうとより良い社会にするために法律を厳しくして一人一人が責任を持つと言うしかないけど、それは理想であって現実にするのは難しいところがあるな。基本的にペットは可愛くて大事にされるけど、一番かわいそうかもしれないなあ」と語った。ペットを事業として扱うだけあってこれまでの勉強やお話で分からなかったこと、知らなかったことがたくさんあった。幸福度の高い発言をされた過半数の方とは違い悲観的

な一面も出たが、ペットのことを大事に想う気持ちの裏にある発言を引き出すことができたと言える。

5. 結論

結論から述べると、今回のインタビュー調査ではペットを飼うことによって幸福度は上がる傾向にあった。類似点は根本に動物が好きという気持ちがあること。相違点はペットと関わることによる家族との時間の増減、ペットは可愛いのか、可哀想なのかについての見解に違いがみられた。三人それぞれがペットと関わる立場の違いからペットとの出会い、経済的な負担、共存に対する考え方など様々な違いがみられるが、共通していること根本的なことはペット、動物が好きだというシンプルな価値観である。これは当たり前のように見受けられるが現在もペットが捨てられていることから、動物が好きだという価値観よりも何らかの事情で捨てる理由の方が勝ってしまったのが現状である。これらのことから動物が好きで大事に想う気持ちがより良い社会を作る最大の要因であると言える。

今回はペットを飼っている人に対してのインタビューだったこともありペットを生涯大切にするという意識を持つばかりの調査となったので幸福度が上がる傾向となったが、今後はペットを飼っていない人、可能であるならばペットを捨ててしまった人たちのインタビュー調査にも課題が見いだされた。ペットを飼っていない人すべてがペットを嫌いなわけではない。アレルギー、住居の関係、経済的理由などによりペットを飼えない現状が幸福度を低下させている可能性もある。個人的にはアメリカやドイツで導入されているペットショップでの販売を中止してペットを保健所のみからしか連れて帰るシステムを組むことも必要なのではないかと考え、これからの日本のペット業界がより良くなることを心より願っている。

インタビュー調査による類似点と相違点	
類似点	相違点
根本的には動物が好きである	殺処分は無くならない
癒し、ぬくもりを感じられる	経済的な負担の大きさ
ペットなしの生活はでき	ペットは可愛いのか可哀想

ない	なのか
----	-----

参考文献

サトウタツヤ 2013 質的心理学の展望 新曜社

エリザベス・オリバー 2015 日本の犬猫は幸せか 動物保護
施設アークの25年 集英社新書

杉本 彩 2016 それでも命を買いますか？ ワニブックス
PLUS 新書

藤村 晃子 2010 ペット大国 日本の責任！いのちがおしえてくれたこと 長崎出版

